# ジャムゥの神秘

## クスリウコンの役割

新潟薬科大学 学長／千葉大学 名誉教授
**山崎　幹夫**
Mikio Yamazaki

かなり以前のことになるが、インドネシアでの薬用植物の調査を終えて帰国したときのこと、現地で採集した植物の持ち込み許可を得るために成田空港の検疫所に立ち寄った。するとそこには、植物の根を山のようにカウンターに積み上げた先客たちがいた。かねてから知己の、ある大学の教授と研究室の人たちであった。彼らはやはりインドネシアから、私より少し早いフライトで成田に着いたところであった。カウンターに積まれていたのはほとんどがショウガ科植物の塊根であった。ショウガ科の植物にはインドや東南アジアを原産とするものが多く、またその多くが古くから薬用として利用されてきた。そのため、薬効に関与すると思われる成分の研究も盛んに行われていた。

ところで、世界各地には、私たちにとって身近な漢方医学をはじめとして、インドに伝わるアーユルヴェーダやアラブに伝わるユナニ、マヤ・アステカに伝えられた南アメリカの伝承医学のように、それぞれの地域、民族に特有の医療が伝承されており、それぞれに特有の医薬が利用されてきた歴史がある。

インドネシアにもジャムゥ(Jamu)と呼ばれる伝承医薬があった。ジャムゥというジャワ語(インドネシア語)には「客をもてなす」という動詞的意味と「植物からつくられた薬」という名詞的意味があるらしい。さまざまな植物の根や葉などを利用して病気の人(客)をいたわるという役割が、「客をもてなす」という語意をもつジャムゥに重なって「植物からつくられた薬」という語意が加えられたとも考えられる。

ジャムゥはインドに伝わるアーユルヴェーダの流れを汲み、ヒンドゥー教の伝播とともにジャワに伝えられ、次第に地域の特徴を取り入れたジャムゥへの変遷を遂げたものと考えられる。しかし、やがてジャワがヒンドゥー社会からイスラム社会へと変貌するにつれてジャムゥの存在は蔭にかくれ、処方内容も調合法もごく一部の人たちによる伝承の中に埋もれてしまい、ジャムゥとして展開してきたはずの体系やその歴史も闇に包まれてしまった。

現在、私たちがジャムゥとして理解している内容は、1945年にインドネシアが共和国として独立した当時の混乱した医療の中で、医薬品の不足を嘆いた王家出身の医師セノ・サストロアミジョが自ら調査し集成した『インドネシアの伝承薬』を根拠にしたものである。本書にはジャムゥの薬草、生薬、それらの調合法、薬効、適応症などが記述された。最近は、有名な仏教遺跡ボロブドゥールに近いジョクジャカルタやソロを中心としたあたりに集まるいくつかの製薬会社でジャムゥが生産されるようになり入手も容易である。

前にも述べたように、ショウガ科植物には熱帯地方を原産とするものが多く、ジャムゥの中でもショウガ科植物は頻繁に使われている。期待される適応は、風邪、解熱鎮痛、鎮咳、口内炎、咽喉炎、麻疹、下痢、便秘、利尿、強壮、通経、安産、産後、乳汁分泌、疲労回復、健康増進などにわたって多彩である。また、植物の種類も多く、ショウガ、ガジュツ、ウコン、クスリウコンなどさまざまなショウガ科植物の根茎、果実、種子などが利用されている。

何年か前に、私の研究室でもジャムゥの処方内容についての調査を行ったことがあった。すると、興味あることに、トゥム・ラワク(Temu Lawak)という生薬が処方にごく頻繁に配合されていることに気がついた。トゥム・ラワクはショウガ科のクスリウコン(*Curcuma xanthorrhiza* Roxb.)の根茎を原料とする生薬であるが、調べてみると、配合されているジャムゥ製剤の品目数も処方中の配合量も他の生薬と比べて圧倒的に多い。さながら万能薬のような配合の実態が認められた。

早速、薬効成分の研究にはいったところ、この生薬からはゲルマクロンとザントリゾールが分離された。そして前者には拘束水浸ストレスによる潰瘍生成、自発運動、酢酸注射時の痛覚などを抑制する効果のほかに、ペントバルビタールによる睡眠の時間延長など、中枢神経の抑制を示唆する興味ある薬理作用が認められた。しかし、後者には対照群と比較して328%にもおよぶ顕著な睡眠延長作用の他に目立った活性は認められなかった。ザントリゾールによる顕著な睡眠時間延長の原因については、はじめは肝機能の低下によるペントバルビタールの代謝遅延かとも思われたが、調べてみると肝機能の低下は認められない。そこで、マウスの肝臓ミクロゾームを用いて、ベンズフェタミンに対するN-デメチラーゼ(脱メチル酵素)の効果と、7-エトキシクマリンに対するO-デエチラーゼ(脱エチル酵素)の効果を指標に、肝薬物代謝へのザントリゾールの影響を調べてみた。すると、ザントリゾールは、対照として用いた標準物質SKF-525Aの約3倍にも及ぶP-450阻害作用を示すことがわかった。これらの結果から導かれた私たちの推論は、ジャムゥの中でのクスリウコンには、長い経験の時を経て、痙攣、マラリア熱、黄熱、食欲不振、胃炎、下痢、便秘、水痘、乳汁分泌不全、月経不全、湿疹など、さまざまな薬効が期待されてきたが、万能薬的な使用の実態には、他の配合生薬成分の薬効を長引かせる役割もあったのではないかということであった。

ちなみに、和漢薬にもショウガ科植物は多く利用されており、生姜(乾姜)、山奈、良姜、莪朮、鬱金などの根茎類や、益智、小豆蔻、白豆蔻、草果などの果実類、縮砂、草豆蔻、紅豆蔻などの種子類など、内容は多彩であり、それぞれに有用である。

ウコン